

## 巻頭言

### 「炭酸泉誌第3巻第1号」発刊にあたって

東京大学大学院医学系研究科内科学専攻アレルギーリウマチ学

山本一彦

今は大学院重点化で名称が変わってしまいましたが、私の所属している所は2年前まで内科物理療法学講座と呼ばれていました。大正時代に、時の政府の物理療法に対する期待を込めてつくられた講座です。私のとなりの秘書室の書庫はだいぶ整理されてしまって、昔の資料はそれほど多くないのですが、「内科物理療法学教室昭和15年度発表論文」と背表紙にかかれた合製本を発見しました。その中を見ていると、当時の第二代三澤敬義教授の書かれた、治療学雑誌第10巻第10号の特別講座「温泉療法」のなかに「炭酸泉・放射能作泉」の別冊を見つけることができました。この中には、本炭酸泉誌第2巻第2号に掲載されている、昭和19年東京南山堂発行「温泉療法」とほぼ同じ内容の記載が見られます。戦争の激動期にありながら、ほのぼのとした温泉療法の息吹が伝わってきます。

かつて私が赴任していた九州大学生体防御医学研究所は、昭和の初期に九大温泉治療学研究所として設立された研究所です。今でも温泉プールがあり、慢性関節リウマチの患者さんの治療などかなりの威力を発揮しています。しかし、文部省の大学付属研究所の見直し政策から、温泉治療学の名前をおろさざるを得なくなり、医学部の癌研究施設と合体して、現在の新しい名前になった経緯があります。現在では、免疫学研究の一大拠点となっています。

現在の治療学の中では薬物療法が中心であることは紛れもない事実です。さらに遺伝子治療へと世の中は進んで行くのではないかと思われまます。このような流れの中で、かつて大きな期待を込めて行われ研究された温泉を含めた物理療法は今後どうなっていくのでしょうか。薬物療法と同様に治療効果のエビデンスを出していくことが重要であることはもちろんです。しかし、薬物療法と同じ基準で治療効果の評価をしていくだけで良いのかは疑問です。それだけでは薬物療法の方がおそらく比較にならないくらいの効果を上げるのではないかと思われるからです。そう考えると、物理療法の今後については、人間の生命観、健康観、快適感に根ざした、今までと全く異なった評価のパラダイムを構築し、その重要性をアピールするというのも、一つの方向かもしれません。神経・内分泌・免疫が複雑に影響し合う生体のスーパーシステムの中で、物理的な刺激の重要性は決して少なくないのではないかと思われまます。